

2017（平成 29）年度

課題探究プロジェクトⅠ・Ⅱ
（グローバルアプローチ）

<連携先：福井県国際交流協会、福井メトロ劇場>

実 施 報 告 書

2018 年 3 月

福井大学国際地域学部

はじめに

国際地域学部が創設されてから間もなく2年が経とうとしていますが、本学部の基幹科目として設けられた一連の課題探究プロジェクト科目も、1年次後期に開講された「基礎」に続いて、今年度より2年次生を対象に「Ⅰ（前期）、Ⅱ（後期）」が開講され、いよいよ本格的な運営が開始されることとなりました。Project Based Learningの頭文字を使ってPBLとも称される同科目は、「地域や国際社会が抱える諸課題の探究と解決に能動的に取り組む科目」であり、本学部の履修手引きでは、「実践的な事例研究やワークショップ等を含むプロジェクト学習を継続的に深めながら、専門学問分野の知識と方法を修得」することが、その目的として謳われています。

近年、大学教育におけるアクティブ・ラーニングの重要性が盛んに唱えられ、それを実現するための授業形態として、多くの大学・学部がPBLを授業に取り入れるようになりました。今や時代のトレンドとなった観すらあるPBLは、文系・理系を問わず幅広い分野で実践されていますが、それがなじむ分野となじまない分野があることは否定できません。学際的な研究が広まり、学問分野を単純に分けることができない時代になりましたが、文系の分野でいえば、PBLとの相性という点で社会科学が人文科学よりも勝っていることは、本学部のケースを見ても明らかでしょう。

現在、地域創生アプローチの学生を対象に開講されている10のプロジェクトは、企業や自治体での研修を軸に据えたものが大半を占め、いずれにも社会科学的な性格が顕著に見て取れます。一方、グローバルアプローチの学生を対象とするプロジェクトは、当初、福井県内の酒蔵をフィールドとするものしか構想されていませんでしたが、このプロジェクトもやはり、社会科学の範疇に含めることができます。このように本学部のPBLの内容が社会科学一辺倒である点、さらには、グローバルアプローチの学生にはプロジェクトの選択肢がない点を問題視し、欧米や中国の文学や言語、文化を専門とする教員が協力して、人文科学的な性格を持つプロジェクトを急遽立ち上げることになりました。この報告書に記録された二つのプロジェクトがそれです。

教育地域科学部時代の地域課題ワークショップ科目を引き継ぐ形で実施された「Ⅰ（前期）」のプロジェクトに対して、「Ⅱ（後期）」のプロジェクトは新規の試みとなりました。両者を受講した5名の学生たちの言葉で編まれた本報告に関して、皆様の忌憚のないご意見・ご感想を賜ることができれば、大変ありがたく存じます。最後になりましたが、二つのプロジェクトを陰になり日向になり支えてくださった福井県国際交流協会並びに福井メトロ劇場の皆様方に、担当教員一同、心より御礼を申し上げます。

2018年3月 担当教員一同

課題探求プロジェクト I (グローバルアプローチ・連携先: 福井県国際交流協会)

担当教員 (五十音順):

磯崎康太郎、今井祐子、木原泰紀、呉少華、永井崇弘、松田和之、皆島博

1. プロジェクトの構成と概要

1) 授業のアウトライン

地域課題の発見と解決に取り組み、その成果を福井県国際交流協会が主催する「福井国際フェスティバル」のなかで企画展示として発表し、同協会にて実習も行った。その活動は次の二点に大別される。

- ① 授業時の活動は、大学およびヒアリング調査のために校外(福井県国際交流協会、坂井市三国町、あらかわ市等)で行った。
- ② 授業時の活動と並行して、6月以降、福井県国際交流協会が催す会議等に参加し、国際的催事のための企画・運営を担当した。

同フェスティバルは、福井県内で外国人と地域住民とが交流する催しとして毎年秋に福井県国際交流会館において行われており、2017年で21回目の開催となる。毎年の来場者数は約5,000名である。



2) 授業の進行

課題探求プロジェクト I	福井県国際交流会館での実習
第1回 2017年4月12日	企画運営委員会(第1回) 2017年6月18日
第2回 2017年4月26日	企画運営委員会(第2回) 2017年7月9日
第3回 2017年5月17日	企画運営委員会(第3回) 2017年8月6日
第4回 2017年5月31日	企画運営委員会(第4回) 2017年9月3日
第5回 2017年6月14日	企画運営委員会(第5回) 2017年10月1日
第6回 2017年6月28日	前日準備 2017年10月14日
第7回 2017年7月12日	福井国際フェスティバル当日 2017年10月15日
第8回 2017年7月26日	企画運営委員会(第六回) 2017年11月12日
最終成果発表会 2018年1月24日	

- ① 各回の授業は、基本的には2コマ（3時間）連続で実施された。
- ② 最終成果発表として、年度末にグローバルアプローチのもう一つの課題探求プロジェクト「酒蔵プロジェクト」と合同での成果報告会（2018年1月24日）を実施した。

3) 授業の目的

- ① 福井や地域社会における外国人の現状を理解し、とりわけ文化と言語の観点から、課題の発見と探究に当たる。
- ② 学生が主体となって、ヒアリング調査等を行い、地域住民や外国人との協働のあり方を学ぶ。
- ③ 地域社会をグローバルな視点で複眼的に眺める姿勢を身につける。
- ④ 国際的催事にスタッフとして参加することにより、地域住民や外国人と交流し、実践的なコミュニケーション能力を養う。

2. 受講生による報告

1) 遠藤 優海

授業は基本的に2週間に一度行われ、必要に応じて学生のみでのフィールドワークや先生に引率していただき現地での授業外の活動も行った。本格的に活動が始まったのは4月26日の授業からで、この日は3人の先生方から基本レクチャーとして福井県の国際交流の状況や福井に多い中国人に関する事、福井の伝統工芸品に関する事を講義形式で説明された。次の授業では学生5人それぞれが興味関心のある書籍を読み、それについての書評会を行った。ここから国際フェスティバルでどのような展示を出展するか話し合い、福井に密着した内容が望ましいことから「福井の観光マップ」を作成する方向へ決まった。5月31日には実際に国際交流会館に赴き、担当の方からフェスティバルの概要や来場者の傾向などを教えていただいた。これ以降の授業では実際にどのような展示を作成するかを話し合い、三国・あわら地域に範囲を限定し、様々な意見からマップではなく観光ルートの作成へと方向を転換した。夏季休業の期間も集まり、展示物を作成し、休み明けに先生方にチェックしていただき最終修正を加えて本番に臨んだ。

国際交流会館では毎月一度の企画運営委員会が開催され、全体協議の後、各部会ごとの細かい打ち合わせが行われた。私たち5人は2人が総務部会へ参加し、3人は自分たちの展示を運営するために2階部会に参加した。全体協議では意見を求められることもあった。各部会での話し合いではより自分の意見が求められることがあり、委員の一員である実感を得ることができた。2階部会全体で行う企画が必要だったので、自分たちが準備していた展示以外のことをすることも決定した。フェスティバル本番準備として5時間程度の前日準備が行われ、自分が所属する部会の作業中心に協力して準備作業をした。フェスティバル当日は2階部会に所属する3人は自分たちの展示につきっきり

で携わり、フェスティバル全体をみることは難しかった。総務部の2人は会場の全体補佐として動いていたようである。

国際地域学部としての国際フェスティバルへの参加は初めてであり、いったいどのような展示をするべきなのか、とても手探りで調査だった。地域とのつながりを考えた展示ということで私たちが盛り込みたいグローバルな事柄とどうかけ合わせられるのかを考えることが一番の難しい点だった。当初の案であった福井の観光マップでは英語表記をすることや外国人に人気の出そうなデザインにしようという計画もあったが、最終的に福井の観光ルートを作成する過程で現地調査や企画立案に思ったよりも時間がかかってしまい、理想としていたグローバルな視点に力を入れることができなかった。また、学生の力だけではなかなかアイデアが浮かばず、先生方のアドバイスを参考にすることが多くなってしまったことも反省点だと感じる。

工夫した点としては、5人という少ない人数だからこそ全員で情報共有をしっかりとできたところだと思う。それぞれが違う分野のことを調べてから、それを共有することで時間を削減することもでき、進行がスムーズに進んだ。また、全員がメンバーの意見やアイデアを聞くことができる環境であったので、意見を言いやすく、調べたことや得た情報を共有でき、そこから別な視点でのアイデアが生まれていたと感じる。

自分たちで実際に現地調査をすることで、実際の福井の現状を知ることができたことは大きな成果だったと思う。福井県外出身者のみの環境で福井の観光について考えると、一般的に知られている名所にしか目がいかない可能性もあったが、実際に自分たちの目でみたり、現地の方々に直接話を聞くことで思っていたよりも福井のことを知ることができ、どのように・何を発信すればいいのかを考えることができた。また、学生のみで店舗に取材交渉を行ったことで、コミュニケーション能力の向上と先方への礼儀や配慮を学べたと感じている。実際にアポイント無しで取材を申し込み、断られてしまったお店もあり、社会での礼儀の大切さを実感した。

三国・あわらで行った現地調査をもとに、三国駅前、東尋坊、あわら湯のまち駅前を中心とした3つのコースを展示することにした。福井駅から現地までの電車の所要時間と料金を記載し、自分たちが紹介したい場所やお店を回りやすい順番で考え、その場所でどれくらいの時間を要するかを予想し、コース内容を作成した。現在地から次の地点までのバスや徒歩での移動時間も予想し、コースの時間も決定した。最後には福井駅まで戻る計算ですべてのコースを作成した。そして、3つのコースで紹介している場所やお店については営業時間やおすすめ商品などの詳細を記載した画用紙を展示した。また、提灯の絵付け体験をさせていただいた「いとや」さんは日本人だけでなく、外国人にもおすすめできるだろうということで、提灯絵付け体験について所要時間や料金、個人の感想などを加えた1つの展示を作成した。そのパネルの上には5人で作成した提灯を飾った。それに加え、現地調査の際に撮影した写真をたくさん展示した写真コーナーも作成し、来場者の方々によりおすすめの場所やお店の雰囲気を感じてもらえるように工夫

した。また、本番前最後の授業の際に、先生方から作成した3つのコースをパンフレットにし、配布してはどうかという提案をいただいたことから、パンフレットを作成し、配布した。パンフレットにはえちぜん鉄道と三国駅前から東尋坊へのバスの時刻表と紹介しているお店などの名前も掲載した地図を記載し、実際に持ち歩いて使ってもらえるように工夫した。

国際フェスティバルの場で実際に展示してみると殺風景で寂しい感じがしたので、前日準備の際に輪飾りや花飾りを作成し、飾り付けをした。展示物自体は工夫して見やすくてきたと思うが、なぜ自分たちがこの展示を作成したのかという意図がわかるような説明書きをしていないことに気が付いた。当日は委員会で頼まれた子ども向けの手作りハロウィーングッズコーナーに付きっきりになってしまい、展示を見に来てくださった方々への説明ができなかったので展示作成の理由を掲載しておくべきだったと反省した。ただ、途中でそのことに気が付いたので、私は部屋に入ってきてくださった方々に話しかけ、福井大学の国際地学部での活動や今回の展示のポイントを説明した。実際に説明をしたことで展示への反応を直に聞くことができ、お客さんの質問にも答えることができたのでとても良かった。

当初、私は展示内容は国際色あふれるものにできるのだと考えていたが、地域とのつながりを重視することも考えなければならず、この点が私たちにとっての一番の課題であったように思う。このPBLにおいて最も重要なことは一年生のときから様々な授業で考えてきた「グローバル化」だったのだと思う。地域の課題をグローバルな視点で考えていくことが必要だったと思う。私たちは地域の課題に注目しすぎてしまい、グローバルな視点を展示に取り入れることができなかった。ここが私にとっての一番の反省点である。限られた時間の中だったとはいえ、コース展示やパンフレットに英訳を加えることや留学生からの意見を活用したり、留学生向けにフェスティバルの案内を発信することもできたと思う。5人という少ないメンバーだったからこそきれいにまとまった展示を作ることができた一方でアイデアがあまり出ず、先生方から意見をたくさんいただいていたことも反省点のひとつである。もう少し学生主体でのPBLにできればよかったと思う。それから、やはり初めての国際フェスティバルと運営委員会への参加ということで、情報が少なかったことが問題点であった。委員会の運営状況やフェスティバル当日の雰囲気や来場者の層などは事前に知っておくべき情報だと思う。

このような反省点を生かして、後輩にはより良いPBLへと変えていってほしい。まず、一番大切なことは展示のテーマである。私たちは地域の課題にとらわれすぎてしまったので、今後はもっと自由な発想で地域とグローバルな世界を関連付けたテーマを考えてほしいと思う。それから、ただ作品を展示するのではなく、アクティビティを混ぜた参加型の展示を考えることが国際フェスティバルでは重要である。限られた人数で自分たちの展示を紹介するには、お客さんと触れ合いながら内容を伝えられることが効果的だと感じている。今回私たちは自分たちの展示とは関係ない手作り体験コーナーを受

け持ってしまったために、あまり自分たちの展示の良さを伝えられなかった。展示と連動し、かつ楽しんでもらえるような企画を考えていってほしい。

2) 齊藤 杏菜

まず授業中の活動について、最初は各受講生の地元の、福井に活用できそうな長所や、各自で読んだ本の紹介などのプレゼンを行ったり、先生方の講義を聞いたりした。その後、自分たちが何をしたいのか、時間をかけてお互いに意見を交換し合った。国際交流フェスティバルの準備が進むにつれて、実際に国際交流会館に足を運んだり、展示のために三国や芦原に現地調査をしに行ったりした。実際に行ってみて、楽しいと思うところをたくさん発見することができ、それらを多くの人に知ってもらいたいと感じた。やはり、大学の中で話し合っているだけでは分からなかったことも多くあった。新しい発見をしたことで何をどのように展示すれば当日来てくれる人の目に留まるかなど、より深い話し合いができるようになっていった。国際交流会館での部会を通して、このままのテーマで進めていいのか、という疑問があがった時もあったが、話し合いのなかで再検討し、改めてテーマやどのような展示をするのかを明確にして、進むことができた。

国際交流会館での活動として、当日はもちろんだが、本番までの部会がとても大きかったように感じる。今まで、地域のイベントなどでここまで大きなものの企画・運営に携わったことがほとんどなかったのが、地域の方々や社会人と話し合いながらイベントを作っていくというのはとてもいい経験になったと感じる。前日準備では、当日ボランティアの方々とともに翌日の本番のための準備をした。それぞれ役割を分担して装飾を作ったり、自分たちの展示を整えた。国際フェスティバル当日、私は自分たちのブースを担当することになった。自分たちのブースでは福井のおすすめ観光ルートの展示と、手作りハロウィングッズのコーナーを設置していた。フェスティバルが始まると、多くのお子さん連れの方々が私たちのコーナーに足を運んでくださった。時間帯によって多少の変化はあったものの、ほとんど途切れることなく一日中手作りコーナーに人がいたため、そこだけで手一杯になってしまっていた。

展示についてまず工夫した点として、それぞれのコースのお店などの注目してほしいポイントに画用紙で吹き出しを作ったことや、いとやのコーナーの展示の仕方だ。吹き出しは、コースの流れの中だけでは説明できないことを分かりやすく書いた。営業時間や定休日などの基本情報はもちろん、実際に行ってみて自分たちが思ったことや感じたこと、新しく発見して他の人に伝えたいと思ったことなどを書いた。いとやコーナーを作成するに際して、実際に自分たちで三国に行き、提灯の絵付け体験をしてきた。これは、初めに三国に行った時に看板を見つけて知ったもので、夏休みに時間を見つけて行ってきた。話を聞くと、この絵付け体験は最近始まったばかりだと知った。始まったばかりでありあまり人の知らないことを実際に体験した写真や実物の提灯などを展示して、見てくれた人にその魅力を伝えられたと感じた。

困難を感じた点としては、主に展示方法だ。体験型にすれば人が集まってきやすいのだが、福井の観光コースを紹介したいとなると、どうしても体験型ではなく展示型になってしまうということがあった。そんな中でどのようにすれば来てくれる人に楽しんでもらえるのだろうと話し合った。そして、できるだけ単調な展示にならないように、コース紹介用の紙とは別に吹き出しを作ったり、写真の並べ方も工夫したり、提灯など立体的なものを飾ったりなどした。

得られた成果としては、普段の大学生活の中ではあまりできない社会人や地域の方々との交流ができたこと、このようなイベントでの集客方法を学べたことだ。国際交流フェスティバルの企画をする中で、国際交流会館の方々や部会に参加している方々と部会を通じていいかわりを持つことができた。また、フェスティバル当日では、私たちのブースに来てくださったお子さんやお子さん連れのお父さんお母さん、年配の方と一緒に手作りコーナーなどで話をしたり、作業をしたりして楽しく関わることができた。自分たちのブースの企画を通してそうだったが、他のブースがどのようにどんなことをしているのか見ることによって、上手い人の集め方を学ぶことができたと感じる。

私たちは「県外出身の福大生が教える！福井のおすすめ観光コース」というテーマで展示をした。コース紹介としては、三国コース、三国駅前コース、芦原コースの3つのコースを紹介した。これは、それぞれ細かい時間も記載し、自分たちが実際に現地調査した中でどこへの順にまわったらいいかを紹介したものだ。ただコースを書くだけでなく、色画用紙で吹き出しを作り、基本情報や自分たちが伝えたい情報を書いた。また、それぞれのコースのパンフレットを作り、私たちのコース紹介を見て、行ってみたいと思った人がそのパンフレットを見て後に観光コースを参考に三国・芦原巡りができるようにした。いとやコーナーは別に作り、私たちが実際に体験して思ったこと、写真、実際に作った提灯などを展示した。また、別に写真コーナーを作り、まとめて一カ所で様々な場所へ行った写真を見ることができるようにした。この観光コースの展示とは別にハロウィンが近かったこともあり、手作りハロウィングッズコーナーも設置した。

私が特に取り組んだのは、コース紹介の吹き出しと芦原コースのパンフレット作製だ。コース紹介の吹き出しでは、先ほども述べたが、基本情報だけでなく、自分が実際に行ってみて感じたことなど、他の情報誌などには載っていないような情報を書くようにした。芦原コースのパンフレット作製では、行き・帰りの電車で、観光する人ができるだけ時間を自由に動かせるように、できるだけ幅広い時間で時刻表を載せたり、パンフレットでもできるだけ補足情報を吹き出しで書き足したりした。

実際に展示してみて、自分が思っていたよりも見た目がにぎやかなものになったと感じた。また、提灯を展示したことで展示に立体感が出て平面だけのつまらない展示にはならなかったと感じる。反省点としては、当日、手作りハロウィングッズコーナーに人が思っていたより多く来たことで子どもの相手で手一杯になってしまい、メインの展示の説明があまりできなかったことだ。また、英語表記が全然できなかったことも反省点

の一つだ。そのせいもあってか、外国の方はちらちらとこちらを見ていた方はいたが、ほとんど私たちのブースに来られなかった。少なくともコース紹介のコーナーや案内板には英語表記をすべきだったと思う。また、展示がただ見るだけのものになってしまったので、もっと体験性のあるものにしたらよかったと感じる。展示を準備する中でも言われていたことだが、シールなどを準備し、行ったことのある場所にシールを張ってもらったり、コース紹介の場所に来場者が自由に書き込めるスペースを作り、来場者が知っているおすすめのある場所を書いてもらったりするなどの工夫をすればよかったと感じる。

後輩へのアドバイスとしては、反省点として挙げたものと被ってしまうが、英語表記や展示の体験性が挙げられる。また、手作りコーナーで人が手一杯になってしまった経験から、限られた人数の中でどのように当日の人を配置するかがとても重要になると考える。私たちは手作りコーナーに人が多く来たことでそこにいた人ほぼ全員がお子さんやその親御さんの相手をするのでいっぱいになってしまった。それと同時に呼び込みなどをした方がより自分たちのブースをにぎやかに見せ、より多くの人に来てもらうことができるだろう。しかし、自分たちのブースにいることができる人数は限られてくる。だから、来年度からは限られた人数の中でどのように人を配置すれば効率よく動いて、より人を集められるかをしっかり考えてほしいと思う。例えば、最初から自分たちのブースの中でそれぞれ担当する場所を決めて置き、あとは状況に応じて臨機応変に動くようにするとか、どうしても人が割けないのなら、展示のところに人がいなくても来場者がその展示を理解できるように説明をより丁寧につけたりするとよいと考える。

3) 佐藤 遼雅

5月から始まり、10月15日の国際フェスティバルまで、授業時間はもちろんのこと、それ以外の時間を使って、自分たちの展示物の作成や、実際に現地に赴き、課外活動（フィールドワーク）もした。授業時間内では、主に磯崎先生をはじめとしたPBL担当の先生方と、活動計画の確認、決定や、展示物についての方向性を考える、われわれ学生とともにアイデアを出し合うなどといった具体的な内容について議論しあう時間が多かった。前例のない課題探求プロジェクトだったということもあり、いくら生徒が主導して動くと言っても、限界があったため、展示物への方向性やアイデアを決めるに際しては、学生たちの発想不足の感は否めない。この点については、先生方自身の趣向も混ざった印象にある。そのため、2週間に1度ある授業時間も生徒と先生方との心の距離感も多少あったのではないかと感じた。授業時間以外での活動では、国際交流会館に向いて、国際フェスティバルを全体的に運営していくための委員会活動や、委員会の中での各部署に分かれて活動をする部会活動を行った。委員会活動では、わたしたち学生以外にも、国際フェスティバルのために集まった一般の人々や、同じく福井大学から、

教育地域の3年生も混ざっていた。よく言えば個性豊かな委員会ではあったが、毎年の流れを踏襲して行っていた感じがあった。わたしが部会で所属した総務部会は、主にフェスティバル自体の補助的活動や、全体の流れを整理していく活動をした。1か月に1度の委員会活動と同時に部会活動もしていたのだが、総務部会ではやるべきことが多く、決められた会合以外にも集まり、メンバー同士で食事もした。それが総務部会の中では、いきつけとなったのか、総務部会ではそれ以降、年齢を関係なくメンバー同士の仲の良さが深まった気がした。国際フェスティバル当日は、自分たちの展示物の場にいるのではなく、部会ごとにその日に応じて与えられた仕事をフェスティバルのボランティアとして活動した。わたしは簡単に言うと、警備的な活動をした。

今回のPBLを通して得られた成果は、一期生たる宿命として、先生方の支援のもとで活動を一から考え、右往左往しながらもやり遂げた経験である。今回は展示物を決めるにあたって、自分たちのグループで考えを出し合い展示物の内容を決めて、授業時間内に先生方にプレゼンして意見交換をした。自分たちの意見を貫く難しさと意見交換する勇気を学んだ。自分たちのアイデアをどのようにうまく伝えるか、という点で、実際に国際交流会館のフェスティバルの責任者にどのような展示物がいいかアイデアを伺ったこともあったし、フィールドワークで現地足を運び、その場に行ってみることをインターネット上の記載事項と比較して検討するといった、試行錯誤を繰り返したが、自分たちの中では成功したと感じた内容でも一筋縄ではいかないことが多かった。アイデアを形にするというのがとても難しいことが分かった。また、意見交換するという力は、授業だけでなく、委員会活動の場でも求められた。自分たちの意見が、必ずしもの会全体に影響するのではないにせよ、自分の考えていることを、しっかりと論理立てて、はっきりと話す能力は、アメリカ人に英語を話すのと同じくらい訓練が必要なことだと感じた。意見を交換するというのは、今回のPBLを通して、困難を感じる点でもあったが、困難を感じ、その改善を模索する必要性を知ったのが得られた成果でもあった。

最終的に出来上がったのが、福井県の芦原温泉街と、三国駅周辺を、偶然にも県外からきている学生が集まったため、県外生の視点で観光プランを作った。全体的にみると、移動手段をバス、電車の公共交通機関に限定し、分刻みのプランニングを行った三国コース2つと、あわらコース1つの合計3つを展示した。分刻みのプランニングを記した紙を貼っただけでなく、そのプランの中でまわる観光地や、レストランなどの場所を詳しい説明を吹き出しのように張り付け、見る人を意識した展示物にした。その他にも、手のひらサイズのパンフレットを展示物と一緒に配布し、持ち帰ってもらえることを可能にした。また、三国で提灯を作っている「いとや」というところで提灯の絵付け体験をしたことを事細かに書いた紙も貼った。実際に絵付けした提灯も展示物と一緒に飾った。当日には、展示会場で、展示物に加えて子供がトイレットペーパーを使って、手造りでコウモリを作ることができる体験コーナーを取り入れたことによって、子供連れの家族が、自分たちの展示物を見てもらえる雰囲気づくりにも力を入れた。自分が特に取

り組んだ内容は、アイデアの伝え方をどうするかという点であり、ポスター展示をいかに魅せるかという点で吹き出しなどの発想に尽力した。しかし、今回自分たちが作成した展示物は先生方からいただいたアイデアも少しあったので、すべてを自分たちで作成したわけではないということが反省点の一つである。さらに、外国人を意識して英語を使って展示物を作ることが出来なかったのも反省点の一つだと感じた。そのため、実際の展示を見たときに少し魅力が足りないと感じたし、時間が十分にあったのだから、もう少し何かできたかもしれないと後悔を感じたところも少々あった。

反省点

- ・国際フェスティバルの展示物にグローバル性、つまり、外国人を目的とした視点を取り入れることができなかった。
- ・もう少し学生たちのアイデアを積極的に取り入れていくべきだった

後輩に伝えるべきアドバイス

- ・今回、参加した自分たちの活動内容をそのまま伝えるべきである。
- ・できるなら、今年参加した学生たちが一緒になって参加するべきである。

4) 奈良 健一郎

授業内では、まず学生が皆県外出身ということでそれぞれの生徒の県で行われている町おこしのようなイベントを調べてきて発表した。そして福井大学の県外生が教える福井の観光ルートというテーマにたどり着いた。この観光ルートはタイムスケジュールのようになっていてその時間に沿って自分たちで観光できるというのが大きなメリットである。さらに皆が知っているような東尋坊、芦原温泉だけについてのパンフレットなどはいろんなところで手に入れることができるという点からオリジナリティを出すためにこれらのような有名な観光地の周辺にある、自分達県外生が実際に行って見つけた穴場のような場所もピックアップすることに決めた。その結果、東尋坊では、東尋坊オリジナルのプリクラ、三国駅周辺では、ジェラート屋さんのカルナや旧森田銀行などを実際に盛り込むことができた。これらの観光地を観光ルートに取り込む際は、そこに行くためのバス・電車などの時間を調べ正確な時間を書き込んだ。営業時間・料金についても正確な情報を記載した。実際にこのルートで行く観光客が無理なく行けるように、そして観光地をめぐる間にコーヒー店に入ったり、ジェラート店に入ったりと休憩もできるような工夫も施されている観光ルートを作ることができたと感じた。

国際交流会館では、国際フェスティバルに向けてそれぞれの部会に分かれ活動を開始した。自分は総務部会に所属した。総務部会は全体の部会を総括するような部会だが、実際に行う活動はアンケートの内容を決めることや、国際フェスティバルについての広告を袋詰めにする事だった。しかし前日は会場の飾りつけ、セッティングを行い、当

日はパンフレットを配ったり、屋台のテーブルを準備したり、清掃したり、アンケートを配ったりと忙しい部会であった。さらにどこに何があるかわかるようにお客さんを誘導してどの場所でどの時間には何がやっているのかわかるように受付付近でタイムスケジュールを記載したポスターを、お客さんが見やすいように設置した。総務部会として工夫した点は、お客さんだけでなくボランティアの方々からもアンケートをとることで、次の国際フェスティバルで今年よりもボランティアの人数が増えるような宣伝・広告を考えたつもりである。そのため、そのアンケートで尋ねた項目には、国際フェスティバルに参加した動機、どのように情報を手に入れたかなどの質問が含まれていた。

困難を感じた点は、まず人数が少なかったこと、そして時間が限られていたため、やれることにげんかひがあったことだ。もう少し時間があれば、国際色を出すために英語版も用意することができたと思うが、それは時間的に厳しかった。それから、自分たちの選んだテーマは、そもそも国際色を出しにくいテーマであったのかもしれない。

国際フェスティバルを通して、様々なボランティアの方々展览展示物がそれぞれお客さん呼び込むための工夫がなされていたため、どのようにお客さん呼び込むのかなどたくさんことを学べた。さらに当日総務部会員として、アンケートに答えてもらうために外国人の好きそうな忍者のコスプレをしていたのだが、自分が思っていた以上に外国人が話しかけてくれ、その国の文化について教えてくれたことは貴重な体験だったと感じる。さらに英語を使っているいろんな国の人とコミュニケーションをとれたことにより、世界のなかでの英語の重要な役割を肌で感じることもできた。

全体の構造については前述したとおり観光ルートにその中でピックアップした三国での絵付け体験の紹介、そして実際に取った写真、作った提灯を展示した。そして展示だけでは客があまり来ないと考えてハロウィンも近いということでハロウィングッズを製作できるコーナーを子供向けに提供した。他の学生が作り方を教えてくれるので簡単に作ることができる。そのため多くの子供がそのコーナーを利用していたように感じた。

自分が取り組んだ活動は主に皆で考えた観光ルートのワードでの清書、自分達が行った場所の紹介文の作成などだ。観光地に実際に行って周辺の探索も行ったことにより、意外と今まで知らなかったお店、最近できたお店など、知らないことの発見が多かった。さらに現地で撮った写真のなかから店の雰囲気などをとらえていたりしている写真を厳選していった。この作業により、いろんな店の中の様子などをお客さんに伝えることができたと感じる。展示物は単純なようであるが、人数的にも時間的にも予想以上に大変な仕事だった。

この展示物についてやはり全て日本語表記だったということで外国人があまり展示物を見てくれなかったことが残念だった。そして展示物より子供も楽しめるハロウィングッズの作成のほうがお客さんでにぎわってしまっていた。やはり国際フェスティバルということでお客さんの多くは外国の文化を交流できる展示物・体験のほうにひかれて

いたのだと思う。そして多くの先生も言っていたが見るだけでなく体験できる展示のほうに国際フェスティバルに来る来訪者は子連れ多いということからもう少しお客さんを引き寄せられたのかもしれない。そしてせっかくほかのボランティアと同じフロアでき、しかもそのボランティアが同じ福井大学の方々だったのでもしかしたら協力してもう少しお客さんを呼び込める展示物をお互いに考えることができたのではないかと感じた。

福井大学の展示物についての反省は、やはり国際色を展示物に出せなかったことが挙げられる。さらにハロウィングッズの作成ももう少し展示物に関連するテーマであったら、より展示物のほうにも目を向ける人が多くなっていたのではないかと感じる。そしてやはりそれなりの展示物を作るには人手がいるので来年国際フェスティバルに参加する後輩には人手を増やすこと、そして国際的な文化の交流を実際に感じることができるよう活動を行ってほしいと思う。国際的な文化の交流には、留学などを例外として、めったに触れることはできない。そのため、そのような貴重な体験を提供することができたら国際フェスティバルはさらに良いものとなり、お客さんの数も日本人・外国人問わず増えていくはずだ。

総務部会としての反省は、まずお客さんの食事スペースの提供が不足だったため立って食べるしかできない人を生んでしまったことである。もう1つの食事スペースは3階なので行くのが面倒だと思う。1階、2階でも食事できるスペースを作れるような試みを総務部でできたらよかったと思った。国際交流会館側への意見だが、新しく参加するボランティアの人たちにもう少し情報を提供してほしい。総務部会は最初の部会で初めて参加する人しか出席しなかったのも、なにをすればいいのかまったくわからないまま参加していた。さらに主に年配の方が全体を仕切っていた。もう少し若い人にもそのような経験をさせてほしいし、若い人の意見がまた新しい国際フェスティバルを作っていくと感じる。次の国際フェスティバルで後輩たちにはなるべく自分たちの展示物が展示される部会に所属して当日展示物の近くに待機できる人手を多くするべきだ。今回は総務部に入ったのだが当日は総務部の仕事が忙しく、自分たちの展示を手伝うことがあまりできなかった。しかし総務部はアンケートなどを通して一番部会の中で外国人と交流する機会を与えてくれるものなので後輩にはぜひ総務部もお勧めしたい。結論をいうと国際フェスティバルという課題探求プロジェクトに参加する人、そして当日ボランティアとして参加する人をなるべく多く呼び込むことが来年の課題だと感じる。

5) 広瀬 汐理

授業では主に国際交流フェスティバルでの展示に向けて、フィールドワークで現地調査を行ったり、授業内でどんな展示にするかを決めたりした。私たちの展示は福井の観光地のオリジナルのルートを作成し、福井の人でも知らないような店舗も含めて観光地の紹介をするというものであった。フィールドワークでは、まずあわら温泉周辺のお土

産店や喫茶店を回り、各店舗に展示に必要なインタビューをした。その時には必ず写真を撮ったり、展示にそのお店の情報を使わせていただいたりする許可をお店の人にももらうようにしていた。あわら温泉周辺では、温泉だけでなく、隠れた場所に気になる飲食店や雑貨店を見つけることができた。次に東尋坊、三国駅周辺の調査を行った。東尋坊では東尋坊タワーや海鮮丼店などのお店のほか、現地で記念撮影ができるプリクラ機があることを見つけたり、東尋坊近くにある雄島を訪れたりして、あわら温泉周辺と同様に調査を行った。三国駅周辺では有名なジェラート屋さんや三国提灯の工房のほか、旧森田銀行やフランス料理の惣菜店など個性の強い店舗や建物も調査することができた。フィールドワークの後には実際にその観光地に行く人の立場になって、電車の時刻や店舗の場所、営業時間、料金なども詳しく調べ、三つのルートを作成した。報告会も含め、先生方にいろんなご指摘を頂いて、多くの人が興味を持ってくれ、かつ精度の高いルートになるように修正しながらルートの作成に取り組んだ。

国際交流会館では、国際交流フェスティバルの開催に向けて会館の地下、一階、二階、三階にそれぞれ部会を設置し、企画運営委員として自分の部会の活動に取り組んだ。私は二階の部会に所属し、部会長を務めた。二階部会では、福井大学の展示、外国語大学の展示、JICAの展示を行うことに決まり、各ブースでどんな催し物をするかをまず話し合った。大体の内容が決まった後、そのブースに必要な物品の確認や机やパネルの配置などを話し合った。そのあと、具体的な予算案を決め、最後に国際交流会館の事務局の確認のあと、必要経費の最終的な取り決めを行った。また、部会では国際交流フェスティバルのチラシのデザインや全体的なテーマを決めるかどうかの話し合いも行い、例年はテーマを決めていたのだが、今年は各ブースがテーマに縛られず自由に催し物をするためにテーマをなくすことに決まった。

● 工夫した点

展示で工夫した点は、若い人にもお年寄りの人にも興味を持ってもらえるような展示にするということであった。例えば、展示には実際にその場所がどんなところであるかわかるような写真を貼ったり、お店の情報を書く際に営業時間や定休日も入れたりすることによってより詳しい情報が私たちの展示を見るだけで分かるように工夫した。また、ルートだけでは周辺の地図がわからないので、別に作ったパンフレットに地図を書き込み、お店の場所がわかるように工夫した。また、パンフレットには電車やバスの時刻表も書き込み、ルートの時間通りに回れなくても交通機関の時刻表が見ることができる工夫もした。

展示のほかに私たちは国際交流フェスティバルに来る子供向けに手作りのハロウィングッズのコーナーも企画した。ここでは子供と親がふらっときてすぐに作ることができるようにグッズを考えた。

- 困難を感じた点

国際交流フェスティバルではその名の通り、いろんな国の人が交流できるような催し物が多かったので、私たちの福井にしぼったテーマだと国際色が薄いと感じた。そのため、テーマの絞り込みや決定には時間がかかったり、意見がかみ合わなくなったりする時が多かった。また、時間の都合上たくさんの場所の調査は難しく、時間が限られた中でどれだけ多くの情報を集めて、展示を仕上げるかを考えるのは苦勞した。

また国際交流会館での企画運営委員会では、部会長という立場であったため、部会の人をまとめたり意見を求められたりすることもあった。しかし、初めての国際交流フェスティバルの企画運営委員会の参加であったので、部会での話し合いの進め方や、経費の案を出すのには苦勞した。

- 得られた成果

展示では、多くの人知らないような店舗もいくつか紹介できたため、国際交流フェスティバル当日はたくさんの人に展示を見ていただいた。展示を見る人との交流もでき、その中で展示に足りない情報を指摘していただいた方もいた。展示を作る中でどうすれば多くの人興味を持ってくれるかを考えることができ、今後このような展示だけでなく、プレゼンテーションや発表を考えると今回の展示に足りなかった部分や反省点、他の方からの指摘を活かせると感じた。

企画運営委員会では、一から国際交流フェスティバルの企画を考えたので、こういった大きなイベントで出てくる問題やたくさんの人を呼び込む方法、催し物の配置や内容の話し合いの進め方を学んだ。例えば、料理を提供する人の負担はほかの催し物を担当する人よりも大きいことや、当日に来る人が予定よりも多かたり少なかたりした時の対策など、考えなければならない課題は意外にも多かた。このような機会は普段はないので、部会長を務めたおかげで意見を出したり、企画の中でどんなものが必要になるかを考えたり、自分の所属する部会の企画をわかりやすく他の部会の人や当日ボランティアの人に伝えたりする方法を得た。

- 展示物全体の構成

全体に、調査した観光地をもとにルートを展示し、店の必要な情報を色画用紙に補足説明をするという形であった。ルートに加え、三国駅近くにある三国提灯の絵付け体験ができるいとや工房については最近体験を始めたばかりで、三国に行った人にはぜひ体験してほしいため、いとやの絵付け体験についての展示を別に作成した。いとやの展示には実際に私たちの作った提灯を展示した。また、調査に行った際にはそれぞれの観光地で写真を撮っていたため、あわらや三国のお店や風景の様子が見てわかるようにそれらの写真も一つのパネルにまとめてコメント付きで展示した。

- 展示物のなかで自分が特に取り組んだ内容

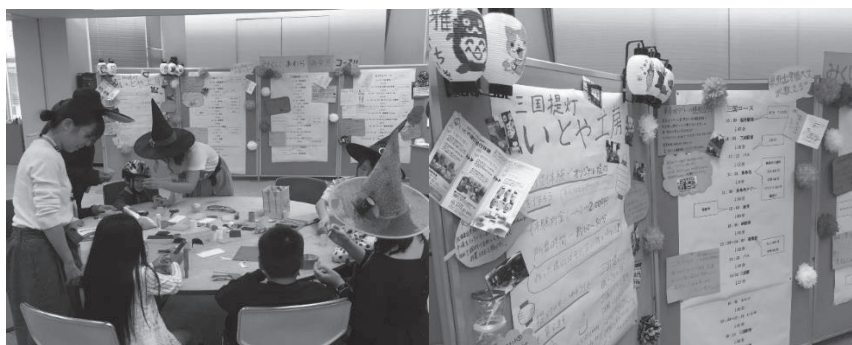
私が特に取り組んだのは、ルートとは別に作ったパンフレットの作成である。パンフレットには自分たちの見つけたお店の情報を分かりやすくパンフレットに加えたり、店の位置が見てすぐにわかるような地図を手書きで加えたりした。

また、国際交流フェスティバル当日は展示のほかに企画していたハロウィングッズのコーナーが予想以上に人気だった。そのため、一日中グッズのコーナーに専念していた。その中で子供に提灯について説明したり、子供の親の方と展示の話をしたりできた。

- 作成した展示物を、実際に展示してみた時の所感、反省点

反省点として、展示の国際的な要素を増やせばよかったと思った。テーマをもっと国際的なものにとということだが、国際的なものでなくても、国際交流フェスティバルに来ていただいた日本人の方だけでなく、外国人の方にも興味を持ってもらえるように、展示に英語を取り入れたり、外国人の方に声かけをしたりするべきであったと感じた。また、人の数が少なく、展示のほうに人を回せなかったため、せっかく来ていただいた人に展示の説明や意見の交換などのお客さんとの交流ができなかった。そのため、もう少しお客さんとの交流に焦点を置いた展示にできればよかったと感じた。

反省点として、国際交流フェスティバルがどのようなものを先に知っておく必要がある。私は初めての参加で企画委員会の部会長を務めたので最初は戸惑うことが多かった。去年に当日ボランティアとして参加していればもう少し国際フェスティバルがどのようなものかあらかじめ知っている状態で参加できたのではないかと思った。また、展示のテーマについても最初に国際フェスティバルの展示や催し物を見たり、どんなものがあるのかを知っておいたりしたうえでよく検討するべきだと感じた。また、当日のボランティアの人も同じ学部の中や留学生に頼んで展示や自分たちのブースに必要な人員を確保するべきであった。今回の国際フェスティバルを通して学んだことや反省点については来年同じことを経験する後輩に伝えたいと思う。だから、上のような反省点の他にも国際フェスティバルの企画運営のことや、展示のことなどについて助言したり意見を交換する機会があればよいと思う。



3. 課題探求プロジェクトの成果

今回の「課題探求プロジェクトⅠ」では、「(県外生から見る) 福井の観光マップ」というテーマ設定のもとで5名の受講生たち、いずれも県外出身者たちが、さまざまな調査結果を活用して、とりわけ三国とあわらについての観光ルートを作成した。「受講生による報告」で述べられているように、展示テーマは県外出身の学生たちが福井の課題を発見し、福井に親しむ良いきっかけとなったのではなかろうか。国際交流会館での活動は、福井県国際交流協会の職員やボランティアの市民の方々との協働のなかで、さまざまな困難に直面しながらも、国際的な催事を実現させる経験になった。主催者側の関係者や地域の方々と交渉したり、協働したりする過程は、社会を知る良い機会にもなっただろう。また、受講生はフェスティバルの場で展示物を来客に提供する役割も果たしたため、その反応をじかに確かめるとともに、外国人や地域の子どもたちとのコミュニケーションの機会に恵まれた。ここでの経験は、後続する「課題探求プロジェクト」や、留学、卒業研究、就職活動といった受講生の以後の活動に役立つと考えられる。

4. 総括・反省

企画運営委員の一員として企画を進めたり、調整役をつとめたりする活動は、大学の外で社会人とともに責任を担う経験である。受講生の報告から、各々が展示の製作と並行し、困難に立ち向かった様子をうかがうことができ、その点は高く評価できる。

展示については、地域色と国際色とをどのように融合させるかといった課題が残されている。また、当日の会場では、展示の仕方にも反省すべき点が認められる。来場者に楽しんで参加してもらいながらも、調査の成果や展示のメッセージを効果的に発信する工夫は、今後必要となるだろう。

課題探求プロジェクトⅡ（グローバルアプローチ・連携先：福井メトロ劇場）

担当教員：磯崎康太郎、今井祐子、木原泰紀、呉少華、永井崇弘、松田和之、皆島博

1. プロジェクトの趣旨

闇に包まれた空間で多くの人が共に古今東西の映像作品を鑑賞できる映画館は、かつて地域の文化発信の拠点としての役割を担ってきた。しかし近年、DVD やブルーレイなどの簡易で高性能なソフトや各種 AVL 機器の発達に伴い、映画館に足を運ぶ人の数が大幅に減少している。その一方で、国際映画祭を催すまでに至った夕張市をはじめとして青梅市や盛岡市など、地方自治体が映画による地域振興に取り組むケースが、昨今珍しくない。また、往年の名画や商業ベースに乗りにくい作品の自主上映・企画上映が有志団体の主催で行われるケースも、各地で増えてきている。加えて、近年、映画の上映会を通じて多文化理解を深める取り組みを行う大学が増えてきている点も注目される。映像文化による地域振興のあり方が学問的な研究対象になりつつあると言える。

本プロジェクトは、テクノロジーに依存する度合いの大きさや顕著に認められる産業的な側面等において他の芸術とは性格を異にする映画の特性を見つめ直し、その存在意義を再確認した上で、福井県内でかつての名画座の面影を唯一今に留める福井メトロ劇場と連携しながら、映画による地域振興の可能性を探る取り組みである。福井メトロ劇場は、「“あなたが選ぶ上映映画”アンケート」や「平和と環境」にこだわった企画上映をはじめとして、市民参加型の映画館を目指す取り組みを積極的に実施している。同劇場のこうした考え方は当プロジェクトのそれと軌を一にするものであり、両者が連携する意義は大きいと考える。

2. プロジェクトの概要

(1) 実施日程

第1回 2017年11月8日：

映画鑑賞（鑑賞作品：ジュゼッペ・トルナトーレ『ニュー・シネマ・パラダイス』（1988））

第2回 2017年11月15日：

根岸佳代氏（福井メトロ劇場支配人）、根岸輝尚氏（同劇場代表取締役社長）による映画業界や福井県内の映画館事情等に関する説明会兼意見交換会の開催

第3回 2017年11月22日

第4回 2017年11月29日

第5回 2017年12月13日

第6回 2017年12月20日

第7回 2018年1月10日

第8回 2018年1月17日：福井メトロ劇場訪問（教員2名、学生5名）

第9回 2018年1月24日

※ 第3回～第9回の実施内容の詳細については、以下に掲載する5名の学生たちの実施報告書をご覧ください。

（2）実施報告書

○ 遠藤 優海

1. 活動内容とその成果及び反省点

（1）授業における活動

11月から本格的に福井メトロ劇場とタイアップしたプロジェクトが始まった。前半の活動では福井メトロ劇場の特徴やその歴史を前館主の根岸義明さんの取材記事をもとに学んだ。そして現館主と支配人のお二人に福井大学までお越しいただき、現在の映画事情や福井県の映画館についてのレクチャーを受けた。そのレクチャーでは映画が映画館で上映されるまでの過程や映画館の種類など今までまったく知らなかったことをたくさん教えていただいた。また、福井メトロ劇場ではどのように上映する映画作品を選別しているか、お客さんに足を運んでもらうために行っている取り組みや工夫なども教えていただき、これらの情報は私たちが企画を考える上でとても参考になった。そしてこのレクチャーの冒頭で行われた1分間自己紹介や、2分間で自分の好きな映画を紹介するというアイスブレイキングは私たちの企画のヒントとなった。しかし私たちが行うプロジェクトによって、福井メトロ劇場やその周辺地域へどのように貢献できるのかを考えることが非常に難しく、企画を具体的に完成させるまでに時間がかかってしまった。その中で福井メトロ劇場の認知度やイベントに関するアンケートを作成し、国際地域学部の学生インターネットを通じて多くの人に答えてもらったが、ここから得られた結果は企画を進める上で参考になった。しかしその他にも、「映画ツーリング」を行う上でどのようなイベント内容が良いのか、どのような特典があれば多くの人に参加してもらえるのかなど、考えるべき課題が多くあった。

（2）福井メトロ劇場訪問時の活動

最初に館内の案内や展示・取り組みについての説明をしていただいた。そして、映写室にも案内していただき、実際に映写機やその映写機を使って映画を投影している様子を見せていただいた。それから館主さんと企画したイベントについて直接話をさせていただくことができた。私たちが行う映画イベントについて説明し、イベント開催の承諾を得た。今回映画ツーリングで観る予定であった作品はアート特集作品のひとつであったため、その特集の中のおすすめ作品なども聞くことができ、イベント内で紹介する作

品のヒントを得ることができた。その他にもイベント終了後に劇場内で行ったイベントの感想などを展示するための例やヒントを教えていただいた。イベントにも前向きな協力をしていただくことができ、この訪問で多くの成果を得た。一方で、もっと前からこのプロジェクトに取り組むことができたら、劇場を利用したイベントを開催することができた可能性やより福井metro劇場へ貢献できるプロジェクトを考案することができたのではと思う部分もあった。

(3) 「映画ツーリング」実施に向けた活動

① 当日の学内イベントに関連した活動

まず、どのような構成にするかをメンバーで話し合った。取り入れるべき内容として鑑賞予定作品であった『セザンヌと過ごした時間』の登場人物である画家のセザンヌと小説家のゾラに関する情報の紹介、今後の上映予定作品の紹介と宣伝、福井metro劇場の紹介が挙げられた。また、『セザンヌと過ごした時間』は福井metro劇場が行う早春アート特集の1作品目ということで、この特集の宣伝も兼ねて今後上映される他3作品の主人公であるヒエロニムス・ボス、ゴッホ、ゴッギャンの3人の画家についてもセザンヌとゾラ同様調査し、レクチャーを行うことにした。しかし、レクチャーだけでは参加者を募ることは難しいと考え、他にどのような要素があれば参加したいと思ってもらえるかという課題について議論した。そこで参考にしたのは「映画ツーリング」というイベント自体を参考にした「映画チア部」のシネマツーリング後に行われているカフェでの交流会である。この交流会は鑑賞作品の個々の感想を共有する場となっている。私たちも学生同士の新たな交流の場としてこのイベントを開催することで、映画好きの学生のつながりを作り映画館に足を運ぶ人が増えることを期待し、この要素を取り入れることにした。映画の上映時間の関係で鑑賞後の交流会は難しかったため、学内イベントの冒頭で自己紹介と参加者の一番好きな映画を紹介してもらおうプログラムを取り入れた。実際に福井metro劇場の館主さんと支配人さんにレクチャーをしていただいた際に私たちはそれぞれ映画紹介を行った。その時に自分が普段観ないようなジャンルの作品を知ることができるよい機会であると感じた。また、イベントと映画鑑賞後に参加者の感想や意見を得ることも今後のプロジェクトのために必要であると考え、インターネット上でアンケートに回答してもらい、その結果をグラフ化し感想なども合わせて福井metro劇場に展示する計画を立てた。

② 学内イベントに関する広報活動

できるだけ多くの参加者を集めるためにはどのような宣伝方法が効果的であるかを話し合った。イベントの参加者を学生限定にしたこともあり、インターネットやSNSを利用した宣伝方法は必要であると考えた。そこでホームページ作成を考えたが、時間がかかるためブログサイトに記事としてイベントの情報を掲載することにした。この記

事を掲載し、URL をメンバーそれぞれのツイッターアカウントなどで共有することで友人などに宣伝した。また、学内での宣伝活動としてチラシの作成も行った。イベントの日時や内容、参加費などを掲載し、目に留まりやすいチラシを作成した。このチラシを学内の掲示板に掲載し、参加者を募った。また、参加者の人数確認や連絡先を管理する必要があったため、どのように集めるかを考えた。チラシに申し込み欄を設けることも考えたが、紙媒体であると提出先を設けたりしなければならず、手間がかかる上に参加者が申し込みをするのに煩わしさを感じる可能性があるという問題点があった。そこで、google のアンケート作成サービスを利用し、参加者の名前・性別・学年・メールアドレスを記入する申し込みフォームを立ち上げた。このサイトの URL を QR コード化し、チラシに掲載することで、スマートフォンを利用してその場ですぐに申し込みが行えるような仕組みにした。QR コードの読み込みのみで申し込みができるようにすることで、参加者が簡単に申し込むことと私たちが情報を管理しやすくすることを可能にした。しかし、参加者を集めることはチラシとインターネットと SNS だけではかなり難しかった。もっと前からイベント内容を決定し、宣伝期間を長く設けることや授業などで教員を通じてチラシの配布を行うなどのより直接的な広報活動が必要であったと思う。そして、映画ツーリングのようなイベントは参加者の口コミや評価などをもとに徐々に有名になるもので、半年に満たないプロジェクトでは、相当の数（例えば 20 人）の参加者を集めることは困難であると感じた。

2. 本プロジェクトのテーマである映画と映画館について

(1) これまでに観た映画の中で最も印象深かった作品

今まで観た映画の中で印象に残っている作品は『スノーデン』という映画作品である。日本では 2017 年 1 月に上映された作品で私は映画館で鑑賞した。これはアメリカ国家安全保障局（NSA）に勤めていたエドワード・スノーデンがこの機関が行っていた機密事項を暴露した事件をもとに作成されたノンフィクション作品である。実際に行われていた国民の極秘監視を扱った作品であり、恐ろしさを感じるとともに主人公のスノーデンの心情や焦りをひしひしと感ずることのできる作品だった。自分自身もスノーデンの思考を追いつながら鑑賞したため、鑑賞後に疲労感を感じたが達成感や国際政治の恐ろしさも同時に感じることができ、本当に面白い作品だったのでかなり印象に残っている。

この事実が報道された当初、世界はインターネット社会の恐ろしさに驚愕したが、日本ではどこか他人事のように報道された。彼が日本に住んでいたことがあるにも関わらず、日本での知名度は低い。問題視されるべき事件であったのに、日本はこの事件に関しての関心が薄い。スノーデンはこの機密事項を告発したことでアメリカ国民だけでなく、インターネットと情報技術が広まったこの時代、世界中どの国でも起こりうる問題であるということを警告している。スノーデンはインタビューにおいて実際に日本で成

立した秘密保護法はアメリカがデザインしたものをもとに決められたものだと発言している。これは NSA が外国政府に圧力をかける手段であり、米政府は日本政府を盗聴していた事実もあると彼は証言している。この作品を通じて、他人事ではなく、日本にも危険が潜んでいることをより多くの人々に考えてもらいたいと思う。

(2) 宮城県における映画館事情

宮城県には多くの映画館が存在しているが、福井県のように駅前に集中して何個も映画館があるというよりは地域ごとに大きなシネコンがひとつ存在している印象がある。最近までは仙台駅前には大きなシネコンは存在しておらず、仙台市で映画を観にいくとすると、地下鉄に乗ってモールに入っている MOVIX 仙台まで行くことが主流であった。しかし 2016 年夏に仙台駅前に TOHO シネマズ仙台ができたため、そこに客が流れるようになった。この TOHO シネマズ仙台が福井でのテアトルサンクであり、MOVIX 仙台が鯖江アレックスシネマのようなイメージである。宮城県での福井metro劇場や福井シネマのような存在の映画館はフォーラム仙台とチネ・ラヴィータである。フォーラム仙台は仙台駅前からは少し離れた場所にあり、metro劇場と似たようなジャンルの映画を上映している映画館である。余談であるがこの映画館は私の祖父母の家の目の前にあるため思い入れが強い映画館である。チネ・ラヴィータは仙台駅前にあり、シネコン要素もあるがコアなジャンルの作品も上映している。

○ 齊藤 杏菜

1. 活動内容とその成果及び反省点

(1) 授業における活動

今回の活動では、授業の中でmetro劇場の方々に大学に来ていただき、metro劇場について、日本の映画館の現状について、また映画が私たちのところに届くまでの仕組みなどについて学んだ。その後、metro劇場とタイアップした企画を行うためにどのような企画を行ったらよいか、どのような準備を進めるかなどを話し合った。metro劇場の方にお話いただいた中で、映画の販路の仕組み、他人の映画経験、二番館という映画館のことなど、今までの自分の映画体験の中には無いものをたくさん知ることができた。特に、私は今まで封切館でしか映画を見たことが無かったので、二番館という映画館の存在を知って、またその魅力、大切さを知ることができたのがよかった。企画に向けての話し合いでは、どのような企画にしたら今まで行かなかったような場所に行くきっかけになるか、ということを中心に企画を考えた。その話し合いの中で様々な意見が出たが、時に路線がずれるときもあり、また何度か企画の目的を確認したりなど、結果として企画内容についての話し合いに時間がかかりすぎたように思う。このことが反省点だと考えている。初めから目的はみんなではっきり共有していたのだから、それから逸れることなく話し合いを進められたらよかったと感じた。

(2) 福井メトロ劇場訪問時の活動

福井メトロ劇場に実際に訪問した際は、福井メトロ劇場の実際の雰囲気や広さを見ることと、イベント当日のことについてメトロ劇場の方と話をすることが目的であった。事前にメトロ劇場について学生にアンケートを行っていたのだが、その中ではじめは入りづらいと感じたという人がいて、私も実際に行ってみてその意見に共感した。場所が分かりづらいこともあり、1人では行きづらいなと感じた。しかし中に入ってみると、様々な映画のポスターや、上映してほしい映画ランキングなどが張り出されており、ロビーもあまり広くはないが、温かさを感じ、居心地の良い空間だと感じた。それらのことから、1度行けばまた行きたいと思うので、他の学生にもまず1度メトロ劇場に来てほしいと思った。その点で、やはり今回の企画をやる意味があると思った。メトロ劇場の方との話し合いの中では、当日のイベントでどのようなことをするか、値段設定、アンケートのことなどについて話し合った。値段設定については自分たちからは切り出せなかったが、相手側から切り出してくださったのでスムーズに話し合いを進めることができた。

(3) 「映画ツーリング」実施に向けた活動について

①当日の学内イベントに関連した活動

学内イベントについては、まずその内容についてメンバーで話し合い、アイスブレイクになるような各自の映画体験を話し合う時間を設けたり、メトロ劇場、鑑賞予定の映画『セザンヌと過ごした時間』、関連の映画『ヒエロニムス・ボス』、『ゴッホ 最後の手紙』、『ゴーギャン タヒチ、楽園への旅』について紹介することなどを考えた。映画の紹介については、映画に関連した画家についてのレクチャーを行うことを決めた。私たちが今回のイベントで見る予定だった『セザンヌと過ごした時間』はメトロ劇場の早春アート特集の最初の映画だということもあり、これをきっかけにその後のアート特集の映画も見に行きたいと思ってもらうために、レクチャーの中ではその映画についてだけでなく、その後に予定されていた映画・画家についても紹介することにした。そのレクチャーの中で私はゾラについて調べる役割だった。ゾラを調べているときに、やはりセザンヌとの関係が多く出てきたので、映画のネタバレにならないような紹介をするためにどのような情報を取り入れてどのような情報は入れないようにするか、ということに注意した。それぞれの画家について手分けして調べることで、時間の節約ができ、みんなで集まる時は集まった時にしかできないことができたことは良かったと思う。しかし、テスト期間が迫っていたことや、企画内容に時間をかけすぎたこともあり、準備に多くの時間をかけることができなかつたのが1番の反省点だと考える。実際、レクチャーについては手分けしたこともあり、それぞれで進めることができたが、イベントについて話す時、その内容決定の進みが遅かったように感じるし、内容もあまりはつきりしたものではなかつたと思う。やはり、テスト期間を挟むことは分かっていたのだから、

もっと早く企画内容についてはっきりさせて、その後の細かい準備により多くの時間をかけるべきだったと感じる。そうしていれば、もっと内容を細かく決めて準備も進めることができたろうし、テスト期間中も余裕をもって準備ができたと思う。

②学内イベントに関する広報活動

イベントに関する広報活動としては、インターネットブログでの広報、TwitterなどのSNSでの広報、学部・学科内のPBL発表会の中での広報、チラシでの広報活動を行った。私はチラシの作成を担当した。パソコンを使ってイベントの題名、日にち、時間などの基本的な内容に加え、申込フォームにQRコードを使えるようにしたり、イベントの詳細が載っているホームページのURLを載せたりするなどの工夫をした。また、今回のイベントでは福井metro劇場のご協力もあり、値段がかなり割引になっているのでそこを上手く強調できるようにした。完成してからも、他のメンバーに直した方がいいところなどの意見をもらいながら少しずつ修正して完成させた。完成したチラシは学部・学科内の成果報告会で配布したり、学内に掲示したり、SNSでも発信した。また、Twitterでの広報では、リツイート機能を利用してより多くの人に今回のイベントを知ってもらえるように情報を拡散した。しかし、応募件数はあまり多くなかったのが残念だった。やはり、広報活動が不十分だったのではないかと思った。当初の話し合いの中で、生協の前でチラシを配るという話も出ていたが、実際に行った方がよかったのではないかと感じた。やはり、今回行ったような広報では一定の人の目にしか留まらなかったのではないかと私は感じる。生協の前などに行けば、学部、学科、学年に関係なく様々な人がいるし、自分たちでチラシを配布することによって、どんな人がどのくらい自分たちのチラシを目にしてくれたのか、興味を持ってくれたのか知ることができる。今回の方法ではSNS上の広報が多かったため、どんな人がどれくらい見てくれたのかはあまりはっきりしなかった。だから、より広報相手が目に見える広報活動もしなければならなかったと感じた。

2. 本プロジェクトのテーマである映画と映画館について

(1) これまでに見た映画の中で最も印象深かった作品

私がこれまでに見た映画の中で最も印象深かった作品は、『ジュラシック・ワールド』だ。この映画はシリーズものであり、出てくる恐竜などが第一作から繋がっていることがこの映画の魅力の一つである。また、この映画では現実世界では体験できないことが映画の中でリアルに体験できる。武田(1992)によれば、映画には様々な表現技法がある。その中の一つにグリフィスによって完成された「パラレル・アクション」という技法がある。これは追跡シーンなどの描写で追う側と追われる側両方のショットを交互に示すもので、サスペンスの効果もたらす(p.65)。私は、『ジュラシック・ワールド』の中でこの技法は多く使われていると感じると同時に、「パラレル・アクション」のもたらすサ

スペンス効果の重要性を感じた。私はこの映画の中では恐竜が追う側、人間が追われる側として描写されていると思う。だから、私は映画を見ながら映画の中の登場人物たちとともに恐竜に追われているような緊張感や恐怖感を体験することができた。また、この映画の中では静かなシーンとそうではない恐竜に追われているようなシーンがあり、このギャップがより映画を見る人の恐怖感・緊張感を高めていると考える。これらのように、様々な場面で見の人が映画の中で疑似体験をできる工夫が凝らされていることが、私が『ジュラシック・ワールド』が印象に残っている理由だ。

(2) 新潟県上越市における映画館事情

『都道府県別統計とランキングで見る県民性』によると、新潟県には2009年の時点で県内に8軒の映画館がある。それに比べて福井は4軒だが、県の面積を考えると新潟県は面積が広い割には映画館の数が少ないことが分かる。私の高校があった上越市にはJMAX THEATER 上越というシネマコンプレックスと高田世界館という2番館の2つの映画館がある。前者は、全国の他のシネマコンプレックスの映画館のように、新しい映画を公開し、スクリーン数も多くあり、集客にはあまり困っていないように感じた。しかし、後者は、1日に4本、多くても5本の映画しか上映しておらず、福井メトロ劇場と似た状況にあると感じた。高田世界館は1911年に「高田座」として開業され、日本最古級ともいわれ、その建物は国の登録有形文化財や近代化産業遺産に指定されているにも関わらず、認知度が低いのではないかと思う。実際、私が高校生だった時もその地域に通っていたにも関わらず、全くその存在を知らなかった。新潟県、特に上越市は福井市と似たような状況にあるので、もっとその魅力を発信し、より多くの人、特に若い人に高田世界館のような2番館にも足を運んでもらう工夫をする必要があると考える。

参考文献

植条則夫編著(1992)『映像学原論』ミネルヴァ書房

○ 佐藤 遼雅

1. 活動内容とその成果及び反省点

(1) 授業における活動

後期のPBLでの活動では、福井メトロ劇場との共同作業を主に重点において、最終的にはイベントで福井メトロ劇場にバックアップしてもらう形になった。授業内では特段目立った活動をしていただけではないが、福井メトロ劇場の事前リサーチやイベントの詳細決定に時間を費やした。特に、福井メトロ劇場に赴いて、映画館の館内見学や、福井メトロ劇場の経営者である根岸さんとイベントについて打ち合わせをしたことは大変印象的で、自分自身の中でも大変実践的なものだと感じており、非常に良い経験に

なつたと感じた。最も心残りとなることは、イベントが実施できなかつたことであるが、授業内での出来事が内容的に希薄だと感じた。なんのために授業の時間を使って生徒、教員が集まっていたのかが最後まで懐疑的だつた。というのは授業の時間に集まって話していたことは、内容的にも特段集まって話すことではなかつたし、それ以外の時間でもできたことではあつた。授業として体裁上集まって行わなければいけないと言われれば致し方ないが、生徒同士で考えて、もう少し濃密な時間にするには出来たと痛感している。

(2) 福井メトロ劇場訪問時の活動

福井メトロ劇場に訪問し、館内見学とイベントの打ち合わせを行ったが、今まで映画館を訪れ、映画を見る側だつた自分にとって、生の映写機を見せてもらえて事は生まれて初めての経験であり、この上ない感動を覚えた。イベントの打ち合わせに関しては、自分たちの拙い内容を伝えることができ、現在館長である根岸さんも好意的な人だつたのでこちらとしても関わりやすかつた。根岸さんは現在の映画館の問題を福井メトロ劇場だけではなく、全体的な問題として考えていたので、僕たちも何とかその力になりたいと思つた。またいつかどこかで関わられたらと感じている。

(3) 「映画ツーリング」実施に向けて

① 当日の学内イベントに関連した活動

そもそも「映画ツーリング」は他大学がやっていたイベントで、インターネットで見つけ、模倣したものだ。その大学も地域の中にある福井メトロ劇場のような二番館とタイアップして「映画ツーリング」を開催していた。地域に根付いて活動することはその映画館だけでなく、地域全体にもプラスになることなので、私は何も知識がない状態でこのPBLに関わつたので、これを真似することがベストだと感じた。このイベントを実施するにあたり、時間のなさを実感したのはもちろんだが、一番の問題点はイベントの集客力だつたと思う。どのようにして人を集めることができるか、この方法の前例を知らずに、付け焼き刃のような知識だけでやり始めたのは薄々気づいていたが、イベントを実施できなかつたこともあり、どれくらい人が来るのかは最後まで未知数だつたが、こういったことをするときには自分たちで情報収集しなければならないと実感した。しかし、福井メトロ劇場についてのアンケートを取り、事前にターゲットを決めて、イベントを決めたことについてはよくできたと感じた。

② 学内イベントに関する広報活動

広報活動に関しては、もっと広報活動をいろんな形ですべきだつたと感じる。こういったイベントに関しては、一種の結果論的なこともあり、最終的に何人集まり、評判は良かったのかという結果を気にしてしまう部分が少なからずあるので、そういう部分

においては、イベントを実施しなかったこともあり、広報活動がよかったかどうかは何とも言えない部分がある。主に、インターネットを通じて、そして校内にポスターを貼り付けて広報活動を行ったが、あまり手ごたえは感じなかった。声掛けなど、もっと直接的な広報活動をしたほうがより手ごたえを感じることが出来るのではないかと思う部分もあったが、結局実行しなかったのだから、反省する部分はあると思う。

2. 本プロジェクトのテーマである映画と映画館について

(1) これまでに観た映画の中で最も印象深かった作品

私の中の最も印象深かった作品は「**STAND BY ME ドラえもん**」である。この映画は「ドラえもん」の映画版である。普段アニメでやっているドラえもんは**2D**で立体化していないのだが、この映画では**3D**化することによって、子どもはもちろん、大人にも評判のよいドラえもんの映画となった。このドラえもんの映画は、いままでのアニメで感動的な話をリメイクし、**3D**化することでより感受性の高いものに仕上がった。実はこれを初めて観たのは映画館ではなく、**DVD**だった。どうせ子ども向けのドラえもんの映画だからと思い、**DVD**で十分だろうと考えたのだが、立体化することによってより人間的な部分に近づいているからなのか、涙を流すまでには至らなかったが、心が動かされたことは今でも印象深い。ドラえもんの映画以外にも、**マジンガーZ**や**ガッチャマン**といった昔に流行していたアニメが、ストーリーの内容を今の若者向けに改編して**3D**化して、映画化するのは珍しくない。

(2) 出身地（県あるいは市町村）における映画館事情

福井県、特に福井市は他県出身者から見てまれな体系をとっていることが分かる。それは映画館の数からも想像できるが、福井メトロ劇場のような二番館はもちろん、テアトルサンク、福井シネマといった、近年台頭してきたシネマコンプレックスのような形ではない映画館の形が多く、僕自身も初めて見たので驚いた。私の出身地である石川にはシネマコンプレックスがほとんどで、テアトルサンクのような映画館は見受けられない。また石川のシネマコンプレックスはどここの場所でも一通り同じ映画が放映されているので、福井のようにこの映画館に行かないとこの映画は見ることをできないというようなことにはならなかった。だから、映画館が軒並みバランスよく地域ごとに置かれていたこともあって、映画館がつぶれるといったこともなく、また車社会でもあり、映画に困ることはなかったという印象だ。

○ 奈良 健一郎

1. 活動内容とその成果及び反省点

(1) 授業における活動

授業ではまずシネマコンプレックスとメトロ劇場の違いなどを知るために、『ニュー

『一・シネマ・パラダイス』という映画を鑑賞した。この映画からメトロ劇場などの映画館の特徴に対する理解を深めることができた。またメトロ劇場から代表取締役社長である根岸輝尚さんと支配人である根岸佳代さんが福井大学に来てくださり、自分たち学生にメトロ劇場のようなスクリーン1つで映画を上映するような映画館の仕組みについて詳細なレクチャーを受け、理解を深めた。さらにメトロ劇場がどのようなイベントを普段行っているかを確認でき、またこれからの方向性を決めるうえで助言をいただいた。また、学生が好きな映画を紹介することになったのだが、紹介の過程で、映画の中にあるメッセージへの気づき、また映画の役割の大きさの確認などの成果があったと思う。自分たちのこの探究活動を通しての目的はシネマコンプレックスに行く客を少しでも多くメトロ劇場に目を向けさせることだったが、最新作や人気のある映画を公開し1日に同じ映画を何回か公開しているシネマコンプレックスに比べ、メトロ劇場の良さを訴えることの難しさを痛感した。さらに自分達のイベント以降も来てもらえるようにお客さんを誘導できるようなイベントを考えることができなかつたのが反省点だ。そしてイベントについての方向性を決めるのに時間がかかりすぎて、広報活動にあまり時間が割けなかつたことがイベントにあまり学生が興味を持ってくれなかつた原因であると思われる。結果としてイベントは中止になったが、できたとしても残念ながら、参加者はいないという結果となっていた。

(2) 福井メトロ劇場訪問時の活動

メトロ劇場に訪問した一番の目的は自分たちが行うイベントについてメトロ劇場側に紹介して意見をもらうことだった。メトロ劇場側の意見は、自分たちのイベントを映画の内容にちなんで街歩きという形で美術館などにも行くことで地域活性化を図るというものだったが、これ以上規模が大きくなると時間的にも厳しいので実行することは難しかった。メトロ劇場の意見を聞いて他のゴッホなどの映画も美術関係のものとして一緒に宣伝していくこと、割引の結果1,000円にすることができることを知った。方向性について迷っているときにメトロ劇場に行ったら、彼らのアイデアが実行可能だったかもしれないので後悔がのこった。もう少し早めに他の美術館なども連携させることを考えていたらもう少しイベントを規模の大きな魅力的なものにできたのかもしれない。またこのことはメトロ劇場だけでなく美術館側にも貢献できるので時間さえあれば実行できたと思われる。

(3) 「映画ツーリング」実施に向けた活動

① 当日の学内イベントに関連した活動

最初に、どのようなイベントをするのか決めるために大学生がこのようなイベントでどのようなことを求めているのかを知るために国際地域学部の生徒全員にアンケートを行った。イベントで、当日見る画家(セザンヌ)の映画だけでなく、他の画家の映画

も紹介する予定だったので、それぞれのメンバーが担当する画家を決めてその画家についてネットを用いて調べた。またイベントでは参加者が楽しめるゲームを企画した。ゲームの内容はレクチャーする予定の画家について、またはメトロ劇場についてであった。これにより参加者には、楽しみながらこれから見る映画の理解またメトロ劇場についての理解を深めてもらおうと考えた。また参加者同士で映画について話し合い、交流を深める機会も作る予定だった。映画を見終わった後で、メトロ劇場で何かをやるというのはスペース的にも時間的にも難しいと考え、イベント後ネットでアンケートに答えてもらい、メトロ劇場にお伝えする予定であった。また当日の学内イベントが終わった後、どのような手段でメトロ劇場に向かうべきか自分たちで確かめたかったので、実際に福井大学からバスでメトロ劇場まで行ってみた。応募してくれた人の数は把握できていたが、応募しないでイベントに来る人も想定できたので、確定した人数を把握できなかった。そのため、イベントをどのような規模で行うか、またイベントをどのような内容にするか決めることが困難であった。良かった点は、メトロ劇場が割引を提案してくれたり、いろんなアイデアを与えてくれたりと自分たちの活動に関して手助けしていただいたことである。もう少し早い段階でメトロ劇場側と話し合う機会を持てればよかったと感じる。

② 学内イベントに関する広報活動

いろいろな学部の人に知ってもらうためにポスターを様々な場所に掲示した。またポスターに応募フォームをつけることで、どの学部の人かどれくらい参加するのか把握する予定だった。ただ前述したとおり、応募していない人が当日参加する可能性もあったので、人数を確定することができなかった。人数が極端に少なかった場合、行う予定であった映画についての話し合いやゲームなどを行うのが難しくなる。このことから応募した人だけに参加者を絞ったほうがよかったと気づいた。また探求プロジェクトの発表の機会を通じて、グローバルコースの学生のみだったが、宣伝を行うことができた。またその時にポスターを配って、参加を呼び掛けた。さらに **Twitter** の機能を使い、福井大学だけでなくほかの県立大学の友達に呼びかけたりしたので、違う大学の学生と話し合えるめったにない機会を作れる予定だった。さらに、イベントを実行することはかなわなかったが、メンバーのブログで呼びかけることができたので、自分たちの行っている活動、またメトロ劇場という存在について多くの人が少しでも知るきっかけになったのではないかと思う。この探究活動の難しさは、イベント以前にメトロ劇場というものが福井にあることを知らない学生が多かったことだと思う。だからこそ初めての参加者を多く期待し、これを契機にメトロ劇場を訪れる学生が増えることをこのイベントを通して望んでいた。他の広報活動としては、メンバーそれぞれが福井大学の友達に個人的に宣伝を行った。私の場合は卓球部に所属しているので、卓球部のメンバーに呼びかけたり、地域コースの友達に参加を呼びかけたりした。また **Twitter** の効果で他の大学にいる友

達にも福井大学の活動を知ってもらって興味を持ってもらえたのがよかった。

2. 本プロジェクトのテーマである映画と映画館について

(1) これまでに観た映画の中で最も印象深かった作品

自分が印象に残った作品は、漫画が原作の『聲の形』という作品で、2016年に映画化された。この作品は恋愛もテーマとなっているが、私が興味を抱いた点はそのではない。ヒロインである女の子は耳に障害を持っていて上手く言葉を発することができない。主人公である男の子は、耳の障害を理由にその女の子をいじめ始める。最初はほかのクラスメートは皆いじめめる立場だったが、先生にいじめがばれてしまうと、たちまち女の子をかばいだした。ここで私は子供のころ無意識に抱いていた多数者側に行きたいという気持ちを思い出した。その男の子はどんどんクラスの輪から離れていって、今度はいじめられる側になってしまった。最終的には、その男の子に女の子が恋に落ちるのだが、自分が注目したのはなくならないいじめ問題を悪化させている子供の多数者側に行きたいという心理だ。このことがいじめられている側に手助けをする人を減らし、いじめを行う人を増やしている。またヒロインの女の子は耳の障害のため言葉を発するのにも違和感がある。私は聴覚に障害を持った人に出会ったことがなかったので、言葉を発するのにも影響することに驚いた。聴力障害者にとってコミュニケーションがとても難しいことをこの映画は教えてくれた気がした。映画監督の山田さんのコメントによると、この映画はかわいそうとかそういう同情を期待しているのではなく、しっかりと困難に向かって生きている2人の姿を見てほしいということだった。また主人公とヒロインの2人は、いじめという問題に対して似た経験をして、気持ちが通じ合っていく姿を自分は感じる事ができた。

(2) 出身地（県あるいは市町村）における映画館事情

自分の出身地である札幌でも、駅前やデパートなど人が密集する場所にあるシネマコンプレックスの方に客が行ってしまう現状がある。ただ商店街などでメトロ劇場のようなタイプの映画館がたくさん点在していて、いきやすい空間にあることを知った。札幌市の歴史を見てみると、帝国座会館やポーラスターなどの名画座が人気だったが、札幌駅にシネマコンプレックスのシネマフロンティアという映画館ができたため、その影響でこれらの名画座は閉館に追い込まれていった。福井県も同じようにエルパや駅前のテアトルサンクなどの影響がメトロ劇場にとって大きいものだと感じた。都会に行けば行くほどシネマコンプレックスの数も多くなり、単独館へは昔から通っているお客さんに限定されていくと感じた。よって、札幌と福井で共通して言えるのは単独館への人気を取り戻すにはなにか昔にはなかった変化が必要で、しかしそれは昔からきているお客さんを悲しませてしまうかもしれないというリスクを伴うということだ。

○ 広瀬 汐理

1. 活動内容とその成果及び反省点

(1) 授業における活動

今回のプロジェクトでは、福井メトロ劇場と提携した活動として映画ツーリングを企画した。それに向けての取り組みとして、まず、福井メトロ劇場からお越しいただいた代表取締役社長の根岸輝尚さんと支配人の根岸佳代さんから福井メトロ劇場に関するお話を伺った。私たち学生はほとんどがシネマコンプレックスを利用し、こういった形の映画館の利用の経験が乏しいということで、多くの学生に福井メトロ劇場の魅力を伝えるために学生限定の映画ツーリングを企画した。映画ツーリングをするにあたり、いつ開催し、何の映画を参加者に見てもらおうのかを決めなくてはならなかった。そのため、福井メトロ劇場のホームページから上映予定の映画や上映時間を調べ、先生方と話し合いながら映画ツーリングの日程、上映作品、イベントの内容を検討した。また、イベントをする前に、私たちが福井メトロ劇場へ直接訪問し、根岸さんの意見も参考にしながら具体的なイベント内容を検討した。今回のプロジェクトを通して、普段学生が行かない場所に、こういったイベントを企画すれば学生が興味を持ってくれるのかを検討した。まず私たちが参加する学生の立場になってイベントを企画することが大切であると感じた。また、インパクトがありかつ分かりやすい広告づくりやイベント内容の検討などの活動を通して、自分たちでイベントを立ち上げ学生に呼びかける良い経験になった。反省点として、もう少し早い時期から具体的なイベント内容を決定し、準備を進めておけばより内容の濃いイベントを企画することができたのではないかと感じた。

(2) 福井メトロ劇場訪問時の活動

福井メトロ劇場には、イベントを開催するにあたっての下見と、イベントについて根岸さんの意見を伺うために訪問した。まず、福井メトロ劇場の映写室を見せていただき、そのあと、福井メトロ劇場をどのように営業されているのかなどのお話をしていただいた。その後、根岸さんとイベントについて検討し、具体的な案を提案した。得られた成果として、福井メトロ劇場を自分の目で見ることができた。そこで、実際に自分が見て体験した福井メトロ劇場の魅力をイベントに参加する学生に伝えたいと感じた。また、根岸さんからイベントの際料金を割引してくださるという提案があった。また、映画を見終わった後の学生にアンケートを行い、その結果や学生のコメントを福井メトロ劇場に展示させていただいたらどうかなどの意見もあがった。反省点として、事前に根岸さんに質問したい内容をまとめておくべきであったと思った。根岸さんに直接お会いできる時間は少なかったため、その点は見直すべきであったと感じた。

(3) 「映画ツーリング」実施に向けた活動

① 当日の学内イベントに関連した活動

イベント当日はメトロ劇場に行く前に一時間ほど交流会をする予定であった。交流会の内容として、福井メトロ劇場の紹介、映画についての交流、鑑賞予定であった「セザンヌと過ごした時間」に関連するクイズなどのイベントを予定していた。私は、映画クイズに出題するゴーギャンについての情報を調べたり、交流会でどのような進行をすれば学生を楽しませるイベントになるのかを考えたりした。また、福井メトロ劇場に参加者と訪れる際の交通手段についても検討した。まず得られた成果は、自分たちでイベントを立ち上げ、試行錯誤しながら内容を決定することができたことである。なぜなら、イベントを開催するにあたって考慮しなければならない点や魅力的なイベントを作るための努力がとても大変であることを改めて経験できたからである。その分、反省しなければならない点は多かった。まず、学生が参加するため、見る映画は学生が少しでも興味のあるものにしたかったが、日程や時間帯の関係で映画の内容を考慮することなく作品を選んでしまった。また、イベントの決定時期が遅れてしまったことも反省しなければならないと思った。イベントの決定が遅れたため、広報活動にも影響し準備がなかなか進まなかった。また、映画の料金を割引したが、それでも参加費が1000円であるのは自分が参加する立場であった時を考えても、多くの参加者を集めるのは難しいと感じた。そうであるので、イベントを企画する際の参加費や費用のことを最初に考慮した上でイベント内容を練るべきであったと思った。今回は参加者を学生に限定したが、もっと年配の方で福井メトロ劇場をよく知っている人と若い人が交流するようなイベントを企画しても面白いかなと思った。

② 学内イベントに関する広報活動

広報活動として、学内に掲示したり学生に配布したりするためのポスターの作成、インターネットでの広報をするためのブログの作成を行った。私はポスターの作成を中心に担当した。ポスターを作る際、まず見やすさとインパクトを重視した。最低限の情報と、イベントの魅力が伝わるよう、文字を大きめにし、皆の興味を引くようなポスターにしようと努めた。ポスター作製の後は、さっそく広報活動を始めた。まずは映画ツーリングの情報を掲載したブログを多くの人に見てもらうためにSNSでその情報を拡散した。また、国際地域学部のグローバルアプローチ全員が集まった成果報告会でもイベントの広報を行った。得られた成果として、映画ツーリングの情報を見た学生から、イベントが面白そうだという感想をもらった。また、できる限りいろんな学生にイベントを知ってもらうために広報活動ができたと思った。しかし、反省点も多かった。まず、ブログから参加者を募る形であったが、大雪の影響もあったが最終的な参加者はいなかったため、広報活動やイベント内容を十分に理解してもらえなかったと感じた。また、国際地域学部への広報活動はうまくできたのだが、他の学部への広報活動は国際地域学

部にした広報活動ほどはしっかりとできなかった。またほかの学部からの参加については、この映画ツーリングは国際地域学部が開催したイベントであるため参加しにくいという問題もあったのかなと感じた。私が一番に反省しなければならないと思うのは、他学部や、他大学への広報活動についてである。もっと国際地域学部以外の学生が参加したいと思うようなイベントのアピールや広報の方法を見直す必要があると思った。例えば他学部の知り合いに協力してもらい、いろいろな人に声をかけてもらう方法や、私たちが直接他の学部にもっと広報活動を試みる努力をすればよかったと感じた。

2. プロジェクトのテーマである映画と映画館について

(1) これまでに観た映画の中で最も印象深かった作品

私が見た映画の中で印象に残っている映画は、フランスの映画で『夏時間の庭』という映画である。この映画はフランス語の授業内に今井祐子先生が紹介して下さった映画で、祖母の残した数多くの美術品の相続について息子やその兄弟が葛藤するというあらすじである。私がこの映画に興味を持った理由は、祖母が愛した美術品が最後に美術館に寄贈され、使われなくなるのだが、美術品に愛着を持っている息子たちがその美術品を見て切なさを感じるシーンがとても印象に残ったからだ。たとえ貴重で美術館に寄贈するような美術品も、作った目的を果たさなければ意味がないということ、そしてものや家への愛着や思い出が後の世代にも受け継がれるということがしみじみ感じられる作品であった。この映画の監督であるオリヴィエ・アサイヤスは、この映画に出てくる美術品のキャスティングについてこう語っていた。彼は、使い様のある貴重な美術品に焦点を当てて美術品を選んだという。そして、彼が映画の中で三世代にわたる家族構成を選んだのは、今までの家族という概念が崩壊する現代において私たちに家族について考えさせるためであるという。受け継がれる家族の思いや葛藤がよく表現された映画であると感じた。

(2) 出身地（県あるいは市町村）における映画館事情

私は滋賀県の出身だが、子供のころから大きなショッピングセンターに内设されたシネマコンプレックスをいつも利用していた。私は二番館と呼ばれる映画館は滋賀県では見たことがなかったため、福井県に来てから初めて知った。福井県の映画館と、滋賀県の映画館を比べると、滋賀県のほうが映画館の数は圧倒的に多いと感じる。福井県には映画館は片手で数えることができるくらいであるのに対し、滋賀県には大きな駅のそばのショッピングセンターには必ず映画館があった。そのため、福井県に来たときは映画館の少なさに驚いたし、駅からのアクセスもそれほど便利ではないと感じた。福井県も滋賀県も、映画館のほとんどがシネマコンプレックスであるので、どの都道府県でもほとんどの人がシネマコンプレックスを利用しているのだと思った。

2月9日 | メトロ劇場←検索！

国際地域学部2年生Presents!!
University of Fukui
シネマパラダイス
 ~映画好きの大学生集まれ!!~

観賞映画	イベント内容
『セザンヌと過ごした時間』	交流会&映画鑑賞

お菓子・ジュースあります!

日程	2018年2月9日(金)		
会場	交流会:LO1(大学会館2階)	映画鑑賞:福井メトロ劇場	
時間	PM 3:00 受付 PM 3:30 開始	参加費	交通費(片道):160円 映画鑑賞代:1,000円(特別割引!!)
対象	大学生限定	終了	PM 8:00(予定)

参加フォーム 参加希望の方はこちらまで!!
<https://www.facebook.com/20180209ukui>
 詳しくはこちらまで! → <https://www.facebook.com/20180209ukui>

ここからも読み取れます→



3. 総括に代えて

本プロジェクトの実施期間はわずか三か月程の短いものであったため、授業期間内に完結できる取り組みを見定めるのに苦慮したが、ある程度長いスパンで考える必要がある PBL の実施期間と限りある大学の授業期間（学期）との整合は、本プロジェクトに

限らず、学外諸機関との連携を旨とする PBL 科目が多かれ少なかれ抱えることになる課題であろう。今回のプロジェクトの場合、実施期間の短さもさることながら、計画性を欠いた授業の進め方にも問題があったことは否めない。その結果、三か月間、ほぼ毎週のように学生と教員が一堂に会する時間を設けたが、プロジェクトの目的こそ共有していたものの、それに向けたアプローチの仕方において、いつしか両者の認識に齟齬が生じることになった。PBL は基本的に学生が主体となっていく授業形態であるが、教員はそこに、どのような形でどこまで関与すればよいのか、明快な答えを見出せないまま、プロジェクトはいよいよ佳境を迎えることとなったが、そこで予期せぬ事態が起こった。プロジェクトを締めくくるはずのイベントが 37 年ぶりの大雪のため中止を余儀なくされ、本プロジェクトはあえなく尻切れトンボの形で終了することになったのである。完遂されなかったプロジェクトの報告書を作成することに疑問を感じないでもないが、目的を達することはできなかったものの、そこに至るプロセスそれ自体に少なからぬ意味があると考え、あえて不完全な取り組み内容を本冊子に掲載することにした。今後、映画館と連携した PBL を深化させてゆく上で、今回の取り組みにおける試行錯誤の跡をたどることによって得られるものは、決して少なくないはずである。

課題探求プロジェクトⅠ・Ⅱ
(グローバルアプローチ)

<連携先：福井県国際交流協会、福井メトロ劇場>

実施報告書

2018年3月

編集・発行 〒910-8507 福井市文京3丁目9番1号
福井大学 国際地域学部

印刷 株式会社 エクシート